



トコトン話そう「ローカル局の展望」研究会 in Tokyo

放送局がいま、何をすべきか “トコトン”議論だ！



放送サービスが新時代への対応を求められる中、ローカル局はどこへ向かうべきか——このビジョンを探るべく、本誌編集部とマルチスクリーン型放送研究会が「トコトン話そう『ローカル局の展望』研究会 in Tokyo」を2月5日、日本マイクロソフト本社（品川）で開催した。昨年7月、大分朝日放送本社で行われた企画の続編となる今回、80人を超える参加者たちは何を学び、何を思ったのか。

（レポート：高瀬徹朗・本誌レポーター、写真：川津貴信）

マルチスクリーン型放送研究会（マル研、共催）が進行役を務めた討論セッション「失敗を恐れずとは思いますが、どう踏ん切れば……」は、ローカル局が新たな取り組みに向かうための展望と同時に、現実の厳しさが示された。

南海放送が示す 「新規事業成功の秘訣」

まず「展望」を示したのは、南海放送・メディア本部長の清水啓介氏。「あの南海放送でもできること」をテーマに、ローカル局として新たな事業・サービスに取り組むための秘訣を披露した。その秘訣とは、ずばり「お金」。「こんなことをしたい、だけでは経営陣を動かすのは難しい。どうやって資金を回収するかまでも明確に示す必要がある」（清水氏）。つまりは覚悟を持って取り組むこと、そして「何となく」で提案しないことが重要なのだという。

ここで気になるのは資金回収の仕組みだが、南海放送が2000年代前半に取り組んだケータイサイト向けサービスにおいては「ラジオ・テレビ番組に連動させてコツコツと回収」。現在展開中のスマホアプリではシステムを他社に導入

してもらうことに成功している。また、参加したIBC岩手放送から、自社が立ち上げた災害対策用スマホサイトが他局に採用されたケースが報告されるなど、サービスの成功からライセンス事業を展開する、というのは一つの有効な手段と言えそうだ。

静岡朝日テレビ「SunSetTV」に見る 動画配信サービスの課題

一方、「現実の厳しさ」を示したのは静岡朝日テレビ・編成業務局コンテンツ戦略部の堀口貴光氏。無料動画投稿サイトなどで視聴できるコンテンツ配信サービスSunSetTVが置かれている現状について



若年層のテレビ離れ対策として踏み込んだコンテンツを

制作し、ネット界限では一定の支持を得てきたSunSetTV。ただし、前段で南海放送・清水氏が指摘していたマネタイズに関してはうまくいっていないと言えず、「3年間続けてきたが、もうやめてもよいのではないかという声も（社内からは）挙がっている」（堀口氏）と言う。

厳しさが顕著なのは、その制作体制だ。社外の

フリーディレクター、放送作家が主に制作しているが、静岡朝日テレビ社員で言えば「予算管理から制作進行、芸能事務所との折衝や現場ロケのADまで（堀口氏自身が）担当している」という状況。「おもしろい番組を作りたい、という強い気持ちがなければできない」（堀口氏）というわけだ。

2018年4月以降、継続の場合は「何らかのマネタイズは前提になる」（堀口氏）そうで、広告や有料配信など、収入の道を模索しているという。

なお、地上波で同番組の特番を組んだ際には「静岡朝日テレビが視聴できない」という県外のユーザーから苦情も寄せられているようで、放送事業の延長戦上のサービスとしてはともかく、コンテンツとして一定以上の評価は受けているようだ。

若手職員は日々業務に忙殺 学生はテレビ局を選ばず

静岡朝日テレビ・堀口氏が「もやもやすること」として提示した中で、特に気になったのが「自前のスタッフが育たない」という点だ。

前述のとおりSunSetTVは社外のディレクター、放送作家と共に制作しているが、若手社員らに声をかけても「目の前の作業で手一杯」（堀口氏）という現実なのだという。